

半狂亂の姿で、第二發目の引金に指を加へる暇もあらせず、僕等が楯にしたマラコーの立樹の前方、約廿間計の處に、六七本並び立つた雑木を、微塵になれと叩き折つて、雪崩の如く押寄せた鱈魚の勢!! 間一髪を入れず、僕は鋼鐵の鱈魚の尾に叩き碎かれて了ひさうだ。暴風を喰た原頭の一莖よりも脆い最後の運命である? 此時迅く左右にゐた土人は、早や十數間の後方に、宙を飛んで退却した。それと見た僕はくると向をかへて驅出した——途は前夜怖るく草を薙いで、斜めに開いた遁げ路傳ひ、怒濤の様な怖ろしい響に逐はれて飛出す途端——呀と云ふ間に脚を取られて横ざまにとつと打倒れた!!

萬事休焉——起上る暇もなく、阿破や敵勢は覆ひ被さるやうに

切迫した。

僕の生命は風前の燈である!!

### 四十八 血の氣の失せた蒼い顔

絶體絶命!

僕は倒れながらに觀念した!!

施す業もない旅の男、この儘腥い狩場つゞきの樹の下に、鱈の毒爪にかけられて、八つ裂にされるのだ!!!

藻掻いた——藻掻いた——七顛八倒、泥中に刎ね返して騒ぐ途端僕はぐいと恐しい力で締め上げられた。呀つと叫ぶと、さりとと宙に曳上げられた——瞬間! 危うい間際に、どつと地響をさ

せて、巨罎は襲ひかゝつたが、其時は僕の足は地を離れて居た。僕は荒縄を肩へ掛けられて、樹上へ引上げられたのだ。僅か一分——卅秒——否ものゝ二秒と餘裕のない電光石火、僕が倒れるとみて、ばらつと投げた土人の投げ縄に、辛くも生命を取止めたのであつた。

トンマークの巨幹、幾百年か白熱に焼きつけられて、繁茂した一抱餘りの枝に跨がつて、四人の土人がホン／＼と、怪しい懸聲を絞つて縄を曳く——僕は確かに九死に一生を得たのだ。

天祐であつた。全く其としか思はれない、自分で拓いた遁げ路に打ち倒れて、無惨な最期を、遂げやうとした危急な場合。到底鐵砲や火箭の力によつて、救助る事は思ひも寄らぬ——見す／＼罎

の餌食となる處を助かつたのは、文明國で見られぬ投げ縄のお蔭である、土人の手練によつて、辛くも拾つた僕の命！血の氣の失せた眞蒼な顔、紫が、つた黝んだ唇——息の通ふ人間と云ふ已で、荒縄に縋りついて枝に両手をかけた。

襟首を引摺まれて、する／＼と曳上げられた僕の五體は、恐怖にがた／＼戦いて居た。勿論銃は地上に置いて來た。

「有難う／＼」

と樹の空に登つた僕は、良心から感謝の意を表した。土人は投げ縄の徒勞に、歸さなかつたのを欣んでゐる。兎に角今度の狩のマネーチャーたる吾輩を救けたと云ふ事は、渠等にとつて、數正の獲物をせしめるよりも手柄である。

「……そらッ、火箭だッ」  
 と絶叫すると共に、土人は枝に縋りついた儘、伸上つて狩場を透して見る。僕も釣り込まれて首を捻向ける……時!!!  
 今迄樹下に機を窺つてゐた巨鰐の群は、猛然として奮起して幹を撃つた!!

土人は危うく姿勢を取直して、枝を跨いで銃口を向けた!!

### 四十九 咽喉下五六寸の急所

火箭だッ、と云ふ叫びに氣をとられて、前方を透してみやとした不意を覗つて、怖るべき巨鰐は樹下に迫つた。千萬斤の力をこめて幹を叩くが、揺ら〜と揺れるだけで、格別の危険も莫い。

遅鈍な鰐は樹下に伏した。

土人が勢込んで向けた銃口も、施すべき術が莫い。巖のやうな鰐の脊に、彈藥の弱い銃を擬すのは、鐵板に紙玉を打つける様なものだ。

嘗て話に聞いてゐた通り、鰐は容易に樹下を退くまい。然うなれば枝から枝と渡つて遁るより外ない。彌々猿の真似をする事?と思つてゐると、火箭隊の活動は益々熾んになる!!

第二区とおぼしき處の樹立を楯にとつて、五六人の土人が鰐を迎へて、木弓を満月の如くきり〜と引き絞つてゐる。

荒削の握太の弓を握つて、長い火箭に番へた身構へー猛惡な面構へに爛々として輝く兩眼は血走つてゐる。鏑に續いた火繩は、し

ゆつくと煙硝を煙す、——あなやと思ふと土人が、最も苦手とする女鰐の群が、荒廻つて躍りかゝつた。

進つと飛ぶ火光!

流星の如く一筋! 二筋! 三筋! 打放たれた火箭が風を切つて、飛ぶよと見れば、混乱せる女鰐の群に當つて、どつと騒いだ! 命中した!

毒血を含んだ巨口の顎に打込んだ火箭は、火に誘はれて爆薬が凄まじい勢で破裂した——鰐の全身——只火箭彈丸を撃込めるのは、僅かに口中と咽喉下五六寸の急所のみなのである。その急所を覘つて、手練の土人は火箭を射かけるのだ。

二發! 三發! 爆薬の音は修羅場に響き渡つて、口中に火を突込

まれた女鰐はたぢろいた。

混戦! 叫喚!!

刻々に加はりゆく鰐狩の惨状を——僕は息もつかず、樹の空から望見した。脚下一丈の處には、僕等の命を覗いて血に乾いた、舌を干す恐ろしい巨鰐がある。——

火箭隊の奮闘は更に——激烈を極める。

「やつ、遣られたぞッ」

磔の如き叫は耳元に起つた!!

無惨!!

一番年若な土人が、きりきりと弓を絞つて、切つて放さうとする

刹那——

什麼した事か、火箭に結んだ、口繩がもやくと黒い煙を吐くばかりで、一向爆薬に火氣が通はぬ。

此時——一疋の女鰐は凄まじい勢で肉迫した!!

『早く火箭を捨てろッ』

届かぬと知りつゝ、聲を限りに、土人は樹の上から怒鳴つた——  
が効は莫かつた

危機は迫つた!!

### 五十 火箭隊の奮戦

唯一人列を離れた屈強な壯者は、満月の如く引絞つた弓弦に、  
火箭は番へてゐながら、什麼した機會か、口繩が燻ぶつて發火し

ない、その鼻面へ躍りかゝつた巨きな女鰐!

あはや土人は毒爪を打込まれて掻裂かれるのだ!!

途端!

ひらりと木弓を擲り出しさま、諸手をかけた火箭を、真向にかざ

して奮進した土人の剛勇!!

飛鳥の働きは効を奏した!!

怖ろしい爆音と共に鰐は打倒れた!!

剛勇な土人は、所詮遁れぬ處と覺悟して、火箭を握つて鰐の口へ  
突込んだのだ! 口中で爆發した烈火は、鰐の舌を焼いて、致命傷を與

へたのだ!!!

『おーい、早く走れッ』

と樹の上から聲をかける。  
望外の奇効を奏した土人は、血走つた眼に鱔を見捨て、早くも斜に飛んで走つた。

眩めくやうな狩の光景に時は移つて、聽て午前八時頃に、一先づ喚聲は収まつた。

六張の木弓、十一挺の小銃——優勢な土人の勢が狩り立てた、當日の獲物は意外に多かつた。

其より先——僕等は樹下の鱔のびくとも動かぬのに閉口した。

とても退く氣支ひもないので、仕方なしに彌々枝わたりをする事になつた。

危険つかしい格好で、漸やく二三丁離れた處まで引上げた。

『此から拾ひ狩をやらう』

と着手した。

拾ひ狩と云ふのは、當初夜襲を喰つて、寢所を狂ひ出した鱔奴が途中の樹の下や草のなかに、のそり／＼と寝てゐるのを狩るので、火筒隊も鐵砲隊も、各自に自由行動を執る事に一決した。

稍々二三時間、各所で棲まじい銃聲や、風を切る火箭が飛ぶ——狩が終ると舟方が、河口へ船を出して獲物を引あげる。

手負ひの鱔は、彈丸や火箭を喰つた苦しきまぎれに、地響きをさせて川の裡へ躍り込んだ。

待構えた船方は、荒縄の輪を投げかけて、獲物を舷に縛りつける。慥うして卅九疋の鱔を獲た。

## 五十一 蕃刀で鱔の解剖

連日連夜の鱔狩に、勇敢なる土人の群に伍した痛切な感じ、忘るゝ事の出来ない凄惨の光景も、二晝夜に渉つて一段落を告げた、拾ひ狩の面白さが胸に残つて、猿の様な土人の働がまざくと眼に浮ぶ。

全く狩を終つたのは、火の様な日脚も烈しい午前十一時頃であつた。近頃のない獲物の数を誇り顔に数えながら、狩場から引上げた面々は、彌々これから獲物の解剖に取かゝるのである。

ナツクアンの妻は、銅のやうな肌を露はし素裸で、切りに女子供を指揮して準備に忙しい。懸てヤーインミイと云ふ野太刀の様

な蕃刀を手にくさげて、荒くれた土人は、獲物の周囲に這み寄つた。

一時間の前迄は、濁水を潜り、木蔭に潜んでゐた巨鱔も、今は腥い血に塗れて、朽木の如く庭先に積み上げられて居る。

日は益々烈しく照る。ざら／＼と蕃刀が閃めく。土人は積み上げた鱔のうちで、最も巨きな一疋を、する／＼と曳出した。

『さあ、お前から始めろ』

と顎をしゃくつて、ナツクアンは屈強な部下に解剖を命じた。

蕃刀が進つと閃めくと、ざつくと鱔の咽喉もとに斬込んだ。だく／＼と迸ばしり流れる毒々しい血の泉……息も塞るやうな悪臭が、四圍一面に擴がつた。

「臭い。こりやア堪らん」

と一足退ると、土人は一向平氣なもので

「鱧は平常、獸や魚をとつて喰ふから、臟腑が全然腐つて居るんです」

と獨語のやうに呟きながら、血塗れの野太刀をぐいと引抜いた。深い縁の下陰に、慙うした土人と一緒になつて、怖ろしい鱧の解剖を目撃する……と思ふと、郷土日本を離れて來た遠い旅の空が何となく、淋しく胸を騒がせる。

土人は更に蕃刀を取直して、鱧の顎から斜めにざくざくと斬り下げた。臭い血は氣味悪く流れる。土人は蕃刀をぐるりと廻して、鱧の下顎を切離した。

「何にするんだ。其様顎なぞ仕方が莫いちやないか？」  
と訊くと

「顎が一番宜い價になるのですよ。御覽なさい、この通りです、大きな齒ちやありませんか」

と血の滴る顎を片手にぶら下げて、蕃刀でコツ／＼と鱧の齒を叩いて見せる。土人の女子供は他愛もなく怖ろしい鱧の亂抗齒をいぢり廻して

「私、這麼大きな齒でセンサーエを造へたいね」  
と眞黒な顔を見合せて語り合つて笑ふ。

「欲しけりや遣らうか？」

「エイ、頂戴、有難う」



娘盛りの土人の女達は、手にく番刀を持つて来て、我勝に鱈の顎を抉りつつ嬉々として持歸つて行く。

五十二 村盡れで左様なら

何故土人の娘達が鱈の歯を珍重がるかと云ふと、渠等番人の習慣として、漆のやうな肌飾る唯一の裝飾品は、總てこの鱈の歯を原料として製るのである。

セソーエと云ふのは、土人の女が晴の場所に用ゐる腕輪の事で、鱈の歯も巧みに細工したものを繋ぎ合せた、命から二番目の大切な裝飾品であるのだ。支那人は鱈の歯を剝つて熱冷しの妙薬にする土人は種々な細工物を造る、長いのは一寸五六分直径一寸位の

ものも珍らしく無い。

土人は両手を二の腕まで血だらけにして、番刀を使つて鱈の皮を剥ぎにかつた。ペリ、ペリ、と厭な音がすると思ふと、生々しい肉と皮は引ばがれて、臭氣は一層烈しく鼻を衝く——同じ様な事を幾度も繰返して居るうちに、今日の狩を聞つけて獲物を買いに來る皮商人、部落くの眞黒な女子供が、幾十人となき寄集まつて、宛然市を開いた様な騒ぎだ。

ナツクアンは先棒になつて、切りと人垣を潜つて斡旋する。應てナツクアンと商人との間に相場が極つて取引が濟むと、商人どもは怪しげな板の上に、鱈を積みあげて、持て歸つて行つた。腥い血が土に沁んで、繁つた葉の影は波紋のやうに揺れかゝ

る。辛と任務を終へた土人どもは、地面に腰を据えて幾チカルかの日當を待つて居る。

總ての費用を差引いて、百チカル儲かつた。僕は其内五十チカルをナツクアンに裾分けして、残額の五十チカルを旅費にすべく懐中した。思ひも寄らぬ壯舉に成功した上に、更に五十チカルを金を懐中した僕の満足は、今も忘れる事が出来ない程愉快であつた『御苦勞だつた。さあ小舎へ歸つてお祝ひをしよう』

とナツクアンは一同を劬はつてぞろ／＼と引上げて小舎へ歸つた。鰐狩の習慣で必らず祝宴を開く事になつて居るから、ナツクアンの女房は、切りと鰐の味噌煮やら何やら、御馳走の用意に取かゝつた。此間に土人どもは、血だらけな手を洗つたり、顔を洗

つたりして、芳烈なラオ酒の香に鼻をひこつかせて居る。

荒筵を敷いた樹蔭に、いつの間にか日は暮れそめて、聊かの風にも涼味が動き初めた。

ラオ酒の酔が頬にのぼると、土人等は他愛もなく唄ひ狂ふて、嬉しげに手拍子をうつ。女子供まで一座して、興を助ける。恣うして月の光の葉越しに射す頃まで宴は盛んであつた。

其夜、僕はナツクアンの小舎に泊めて貰つた。綿の如く疲れた身體は、横になると其儘、異郷の淋しい夢の思はずぐつすり寢込んで了つた。夜が白々と明けかゝると、僕は急いで出發の用意をした。

妙な荷物を背負ひ込み、日本刀を杖にして思出多いナツクアン

の小舎を離れようとする、正直な土人どもは逸早く庭先に集まつて待つて居た。

「途中まで送つて行く」

とぞろ／＼跟いて来る。

アークランの村盡で彌々土人と別を告げた。

「御機嫌宜う」

「何時頃、戻つて來ますか」

口々に名残を惜む。僕も何となく振捨難いような心持で暫らく其處に立盡した。

第十一信

水上街の奇遇

五十二 河の上に不思議な街

アークランを出發した吾輩は、依然日本刀を杖突いて、熱帯の猛暑を深緑の蔭に凌ぎながら、坦々たる旅途の人となつた。

懐中には鱔狩で儲けた五十チカルの旅費がある。先づ當分は此で宜しと、幾つかの土人部落を越えて行くと、聽てメナム大河の濁つた川面が望まれる。地軸の底に觸れる様な物凄い水音——落

つかぬ旅情を嗟かして、云ひ知らぬ淋しさを思はせる。僕は連も  
ない一人旅に、黙々としてメナム河畔に添ふて降つて行つた。  
兩岸には青空も見えぬ程茂り合つた、熱帯植物の廣草が揺れて、  
岸の近くの水面を掠めて、水草の圓葉が浮んで居る。メナム河は  
川口から三百里の山間に通じて居る大河で、濁つた水を利用して  
外國汽船、小蒸汽が絶えず昇り降りする——シヤム第一の交通機  
關は、只この大河の水の力によつて、未明の民を文明に誘ふて居  
るのだ。

ポツ／＼と氣魂ましい汽笛の音は、間斷なしに川面に聞える、  
暑苦しい濁水の波は日光を受けて、胸の悪い色を湛えて居る。

この沿岸に居住する土人等は、裸で産れて裸で死ぬ未開の民、

衛生とか養生とか云ふ思想は全く缺けて居るから、自分達が生命  
をつなぐ飲料水——即ちこの濁浪滾々たるメナム大河へ、犬猫の  
屍骸を放り込むのは未だしも、大小便を流し込む。その水を勝手に  
に汲上げて平氣で飲用水とする。

變つた郷に變つた風俗を視ながら、僕は暑い日を浴びてメナム  
河畔を數哩下流へ降つて行くと、偶と不思議な賑はひを見た。今  
迄は淋しい部落の樹がくれに、板戸の舎を散見して來たのに引替  
へ俄かに多勢の土人の群が、彼方此方の樹影から現はれて來る。  
はて何處へ行くのか知ら：：：と思つて立停つて前方を見ると、メ  
ナム河の濁水の上に犄々と建連ねた浮屋の軒が、先から先と數百  
軒並んで居る。

「は、あ、此が水上街だな」

と思つて居ると、案の定幾群かの土人はこの水上街を目指して嬉々として繰返して行く處であつた。

樹の枝を組合せて家をなす處もあると聞いたが、この水上街と云ふのは岸からずつと河床に足場を組んで、其上に丸柱、岩削りの板戸を打つけて家を造つて棲息するので、朝夕の涼しい河風に銅の肌を吹かせて、椰子の灯血を圍んで遊ぶ唯一の歡樂場である。

僕はぶらぶらとこの水上街へ入込んで行つた。此は亦珍らしい雑沓で、青物を買つて横嚙りにする土人の女や、薄穢ない半裸體の支那人などが、ぞろぞろと入亂れて噪がしい事一通りで莫い。

土人の男女老若を問はず、一日の勞役に疲れた身體を、この水上街に運んで、黄昏近い水上から船を浮べて飲食物を賣りに來る小船を待受ける。

『カーロツバ、カーロツバ』

『カロチヨ』

と妙な節で客を呼びながら、悠々と船を流して遣つて來ると待兼ねた群集は、蟻の甘きにつくが如く、首を長くして棧橋に人垣を造る。

### 五十四 怪紳士ホールアン君

僕も茫然荷物を背負つた儘、土人の群と押合ひながら、好奇心

に驅られて、カーロツパ船の着くのを待つて居た。鹽で濁つた河水を船首がすつとわけて、愛嬌者の支那人が譯のわからぬお世辭を振撒く。土人は幾チカルかの小錢を出しては、カーロツパを買つて舌鼓を打ちながら頬張る。什麼ものかと思つて覗いて見ると、油濃い支那饅頭を箱にならべて賣つて居るのだ。その後からカロチヨ一賣の船も來た。これは胡麻餅で、桶のなかゝら餅を手切ては味つけ胡麻に塗せて賣る。

僕もアークランを出發してから小半日の旅で、聊か肩の疲れも覺えた。空腹にもなつたから、一つカーロツパでも買つて喰はうと考へて居ると、突然

「貴君、日本のお方ですか」

と聲をかけた者がある。眞に意外とも不思議とも、僕は電氣に感じた如く、驚いて振向いた。すると僕の直ぐ後に突立つて笑つて居る一人の紳士——仍且、銅色の顔に眼ばかりくるく／＼させて厚い唇から白い齒を見せて居るが、帽子、靴、赤いネクタイ、この水上街に應はしからぬ立派な服装である。

「日本のお方でせう」

と繰返して話しかけられた時の嬉しさ懐かしさ、思ひ設けぬ故國の言葉を耳にして、暫らくは不思議な人にでも逢つた様に、物も言はずに見上げ見降し仕て居た。件の紳士はにこ／＼笑ひながら、黒い氣味の悪い手をぬつと突出して、僕に握手を求めた。

「やあ、失敬」

不得已僕も手を出して握手はしたが、扱てこの暹羅の紳士は何者であらうか？ 僕が疑問を懐いて、合點の行かぬらしいと見てとつた怪紳士は、更に言葉を繼いで、意志を通じようとした。

「私、日本の東京に居た事があります。貴君と逢つた事もあります。」

と云ふので、僕も始めて故國の帝都で見かけた暹羅留學生の一人であつたらうと勘づいた。雖然僕は嘗て暹羅留學生と知己になつた記憶が莫い。とは云へ先方で知つて居ると云ふのに、強て知らぬと言ひ張るにも當らぬから

「然うでしたか、御見それ申して失禮しました」と旨く調子を合せて、屹と握手を仕返した。

「私は昨年東京の高等工業學校を卒業して歸つたです。今は盤谷のチーク會社の技師を勤めて居ますが、今日はメナムの上流へ材木買入の視察に行つた歸途……珍らしい處で日本の方にお目に懸つて喜びます」

流暢な日本語で語り續ける。僕も不思議な紳士に出逢つた事を嬉しく思つて、誘はれる儘に傍の浮屋に這入つて、香のいゝバナナを剥きながら、心置なく猛獸狩首途からの大略を話した。

紳士の名はホールアンと云ふ。渠は頗る満足の體で、何吳となしく親切に世話をして呉れたが、日も落かゝるメナム河畔の岸邊に一人僕を残して別れるのが物足らぬと見えて、切りに僕に同行を求めた。

五十五 是非一緒にお出でなさい

聞らすも水上街で知己となつたホールアン君は、嘗ては遠い異郷の空に、旅の淋しさを味はつて來た文明の紳士である。僕の旅途の涯もないのを慰めようと、切りに同行を勧める。

「是非、私と一緒にいらつしいやい。明晩は親友の結婚式に招かれて居るのですから、貴君もお客様になりませんか」

「差支ありませんか……知らぬ人でも……」

「大丈夫です。私と仲の宜い友達で、一緒に日本に留學して居た男です……喜びますよ」

と云ふので、什麼せ急がぬ旅ではあるし、血腥い罅狩に荒んだ

心を、華やかな結婚式で慰めるのも一興と考へたので、同行する事を快諾した。

「さあ出かけませう」

とホールアン君と僕とは、水上街を後に再びメナムの河岸を降つた。顧ると暮るゝに遅き川面にも、夕の色は既に降りて、浮屋の灯がちらくと見える。歡樂場に集まつた土人の聲は、賑やかに聞えて來る。カーロッパ賣の小船は、夢のやうに黒いメナム河を漕いで行く。

河岸の樹立にも夕影は落ちて、些やかな涼味は鳥の音と共に前方に動く。ホールアン君と僕は、とぼくと歩きながら、四方山の話に耽つた。



「何しろ千チカル出して買った嫁ですから、素晴らしい美人です」  
 「千チカルの花嫁……お友達は餘程な資産家と見えますね」  
 「モタムランの部落ぢや一番の資産家でトールアン君は一人息子  
 ですよ」

今夜の花婿はモタムランのトールアンと云ふ紳士である事が判  
 つた。

千チカルの花嫁——五百チカルの花嫁——暹羅の風俗として賣買結  
 婚であるから、金の高によつて美しい嫁は選取りである。憊うし  
 た僻土にも左團扇の親達は、美しい娘を賣つた巨額の金で、安樂  
 な餘生を樂むと云ふ考があるから、稀には戀故の悲惨を見る事  
 もあるが、其は到つて稀である。

ホールアン君の話に依れば、未見の友トールアン君の戀女房は  
 メツチエームと呼ぶ黒美人で、曳く千數多の花盛りであつたが、  
 何しろ千チカルと云ふ大金が手に入らぬ爲、涙を吞んで引退つた  
 者も些くない。

その美しいメツチエームと、今夜結婚の式をあげるトールアン  
 君の得意は云ふまでも莫い。メツチエームも亦、部落第一の資産  
 家の嫁となるのが嬉しさに、両親に強情つては、鰐の齒セソーエ  
 だの、支那商人が賣りに來る怪しい金指輪などに身を飾つて、今  
 日の今宵を待焦れて居たのださうな……僕はこの話を聞いて何と  
 なく、ほく笑まれた。凡て世界の人棲む里には、必らず浦若い戀  
 物語がある。トールアン君とは什麼人か、メツチエームは定めし

意外の珍客に驚くだらう、と思ひながら、聽てセタムランの部落に到着した。

第十二信

結婚式見物記

五十六 不思議な糸巻

セタムランの部落の入口から、殊に樹立の繁るあたり、水音が幽かに聞えて暮れゆく空は静かである。

『あの新しい家がトールアン君の家です』

と教えられて向ふを見ると、成程新しい板屋の一構えがある。無論土人部落の豪家の事で、立派と云ふた處が、仍且壁もなければ何も莫い。荒削りの板を打つけた周圍に、切窓の灯が赤く眺められる。

『餘り遅いので御迷惑でせう』

と云ふと

『否え構ひません。是非私が列席する筈になつて居ますから、待つて居る筈です』

ホールアン君は手輕に言退けて、さつさと急ぎ出した。僕も黙つて後に跟いて行つた。

聽て入口に着くと、案内のホールアン君は、奇妙な聲で譯のわ

からの言を云ふと、家の裡からも頓狂な蠻音で返辭をして飛出して来た眞黒な裸體紳士、一寸、僕の姿をみると燕返しに引込んで洋服の上著を引かけて現はれた。簡単に紹介されて土間から座敷に案内された。

がらんとして格別の裝飾も莫く、疊ならば十五六疊も敷けさうな廣間に案内されて、扱て案内者から主人公に僕の來歴を紹介して呉れた。人の好きさうな主人公も嘗て日本に留學した事があると云ふので、一方ならず僕の訪問を欣んで待遇して呉れた。

僕は沁々花婿の容貌をみて、これが文明の輸入者か、——と、無邪氣な舉動を懐かしく思ふて居た。

間もなくラオ酒が運ばれて、主客三人鼎座して隔てない物語り

に夜を更した。

僕は盃を受けながら、部屋正面に不思議な佛壇を發見した。金色な釋迦の像は故國日本の寺院に見るものと異ならぬ。蠟燭の灯は揺らくと瞬いて、佛前に供へた百味の飲食、野生の花の香の高い幾十輪を盛りあげてある。

嫁を取るに佛壇を飾る——其さへ既に不思議なのに、更に珍妙な糸巻を發見した。外でも莫いが、正面佛像の前に叮嚀に置かれてある白木線の糸巻、はて何にするのかと注意してみると、その糸巻の一端から白い淨い糸が伸びて、佛像の手に絡めてある。その糸の行衛をみると、すーつと切窓の外へ出て居る。益々不思議に思つて熟視すると、反對の窓から木綿糸が傳はつて、再び舊の

佛像の手に戻つて居る。何としても了解が出来ないので、主人公に其理由を訊すと

「あの糸は、佛の光で悪魔を拂ふのです。佛の手から窓へ、窓から軒、屋根とくるく／＼家屋を繞つて居るのです」と云ふ。

「花嫁さんを取るにお佛壇を飾るのは當國の習慣ですか」

と訊くと、傍に居たホールアン君は僕の言葉を引とつて、その理由を説明して呉れた。曰く暹羅は宗教の國であるから、何事につけても先づ佛を祠つて、佛果を祈ると云ふ譯で、結婚の時には何は扱置き先づ佛壇を飾り、總て僧侶の指揮を待つ事になつて居るのださうな。

## 五十七 嫁送りの炬火

見るもの聞くもの一々不思議な事はばかり、僕は陶然たる酔心地に、ヲオ酒の盃をあげながら、寛いだ静かな宵を興味ある物語りに耳を傾けて居た。

お佛壇の前には、更に二個の大きな鉢に、満々と清水を湛えて供えてある。この鉢の水に就ては一層面白い迷信が宿つて居る。

昔、釋迦が降誕した時、天の龍王が一大洪水を降して、釋迦の體を淨めたと云ふ故事が習慣となつて、眞黒々の新郎新婦は結婚の筈に於て、この鉢の水を浴びる事になつて居るのだ。

「この清水を灑げば、身體の穢れが除かれて、美しい心持になり

ます』

花婿 トールアン君は、眞面目くさつて述べ立てる。これも洗禮の變つて來た習慣であらうと思つたが、何しろ憊うした離れた土地で、故郷で見る様な釋迦の像を見る——而も蠟燭の灯の赤い瞬き、線香の揺らぎ——何とも云へぬ心の和みに、更け行く夜は星影さへ樂しげに、土人部落の空を照した。

何しろ酷く疲れたから、宿ませて貰う事として宴を徹した。僕はホールアン君と共に、板敷に花萼をのべて横になつたが、家内は何となく騒めいて、明日の用意か——厨に皿の觸るゝ音が聞えた。

肩に重い荷も脊負はず。手に汗ばんだ日本刀も握らず。腳踏み

伸して寢轉んだ枕元に、椰子の灯皿が置かれて、ちよろ／＼と夢を誘ふて居る。懸てうと／＼と睡魔に囚はれて夢の國へ落ちて行く——嗚呼、樂園の夢の深みに、思ふ事もなく寐た日本の旅人は人の情に露にも濡れず、屋根の下に宿る事が出来る。昨日までは鰐棲む淵に息を凝した苦心にくらべて、今宵の宿は實に金殿玉樓である。

一夜は白熱のもとに明けた。

今日ばかりは悠くりと休憩が出来ると思つて、十時近くまで寢過した。朝飯も晝飯も主人公の心づくして、さまざまの舌辛い馳走になつた。朝の口からがや／＼と多くの土人が出たり這入つたりして、嫁取りの御馳走拵へにかゝつた居る。僕は廣々とした部

屋に籠つて、久し振で通信を書いたり、旅日記を書いたりして夕暮になるのを待つて居た。涼風わづかに葉裏の間に動き初めると蕃人部落に活氣は加はつて、富豪の嫁入りを見ようとする老若男女が、轟々と詰かける。トールアン君は先刻から姿をかくした。花婿だけに御化粧でもするのだらう。

僕はホールアン君と窓に倚つて、珍らしい賑はひを見ようとして居た。わあツと云ふ人聲が動揺めくと、向ふの曠道に天を焦す一列の炬火——何事かと驚くと

『さあ來ましたよ。炬火の行列で送り込んで來ました』

とホールアン君は莞爾して居る。炬火を振照らして嫁入りする思ひもかけぬ物凄まじい光景、半裸體の親戚知己が、手にく炬

火を振りかざして遣つて來た。

僕は門口まで出かけて、この壯觀を飽かず眺めて居た。土人部落の結婚式……實に絶好の土産話であらう。

### 五十八 千チカルの嫁御寮

程なく表口へ花嫁の群は近よつた。炎々たる數十本の炬火の灯に照らされる附添の顔も身體も眞黒で、奇聲を發して笑ふ度に恐ろしい眼と白い齒が際立つて見える。

僕は伸上つて花嫁を見ようとした。

其中央に白い雪のやうなパノン（腰布）をつけて、西洋婦人の上衣を着た浦若い土人の娘がある。これが當夜の花嫁、定價千チ

カルのメツチエーム嬢である。花恥かしいと云ひたいが、先づ黒百合の蕾とでも云ふより仕方がない。色も黒く唇も厚く、只セソイエと指輪とが有繁に花の美しさを語るのみである。蟻の様に附纏ふた群衆は退いた。炬火も消された。

『さあ此方へお這入り』

と勿躰らしく花嫁の手を曳いたのは僧侶である。闇にもしるき香染のさわくする衣を、素肌につけた暹羅の僧侶である。僕は親戚知己の男女にまじつて荒筵を敷いた廣間に通つた。

花婿トールアン君は洋服姿で出て来た。眞黒な多くの土人が、いやに取澄して並んだ、光景は頗る奇観である。蠟燭の灯はさやさやと瞬いて、部屋の裡は明るくなつた。佛壇には薫の宜い線香

の煙がたなびいて、何となく落ついた静かな空氣が溢れて居る様に思はれた。

僧侶は先づ花嫁の手をとつて、佛壇の右に座らせ、次に花婿の手をとつて佛壇の左に座らせた。其から親戚や知己がずらりと左右に居流れて座に就く。僕とホールアン君とは、今夜の珍客とあつて上席に招せられた。

彌々婚禮の式が始まつた。

僧侶は佛壇に向つて先づ三拜して、譯のわからぬ經文を読み始めた。その節廻しの可笑しさと云つたら莫い——僕が凝とこらへてゐるに引かへ、一同は至極眞面目に控えて居る。

讀經が終ると、一同は口のなかで何か呟やくように祈りの言葉

を述べた。僧侶はぬつくり突立上つた。何かするのかと思つて居ると、静かに佛壇の左——花嫁メツチエームの前に昨宵から汲んであつた大鉢を両手に捧げた。

鉢の中には清水が、溢れさうに湛えてある。は、あ彼の水をかけるのだなと思ふ間もなく、僧侶は花婿トールアン君の前へ進んだ。

トールアン君は勿體なげに頭を突出すと、僧侶は鉢の中の水を掌に掬つて、ざぶりと花婿の頭に打かけた。そして大鉢を次の土人に渡して置いて、更にトールアン君の前にあつた鉢をもつて花嫁メツチエームの前へ来て同じ様に、頭から水をかけて座に就いた。

すると、入かはり立かはり、知己親戚が鉢の水をざぶりと新郎新婦の頭にかける。

兩人とも襟と云はず、顔と云はず、肩から胸、座つた膝の上までびしょ／＼になつて、濡鼠の様になつた。トールアン君の洋服も、メツチエームのバノンも、肌にくつついて、何とも云へぬ見すほらしい姿である。僕の番になつて大鉢は受取つたが立兼ねて居ると、隣席のトールアン君が

『祝の儀式ですからかけて遣つて下さい』

と私語く。僕も同じ様に鉢の水を兩人の頭へかけてやつた。

此で式は終つたのだ。新郎新婦は座を外した。衣装を更へに行つたのだらう。僧侶も一同もやれ／＼と云ふ様に寛いで、此から



祝宴は開かれた。

### 五十九 竹琴の合奏

静蕭な結婚式を閉ぢると、其からは祝宴にうつつて面白可笑しく唄ひ興するのである。

ラオ酒の瓶が二つ、座敷の真中に取出されると、一座の土人は思ひくくおもに小さい器で汲出して一息いきに垢あはりつける、呑む程ほどに刺戟しげきの強い酒の酔よひは眞黒な頬ほにのぼつて、怪しげに眼めが潤うるんで他愛たあいもなく喜び合ふ。

奇妙な節ふしでノエくくくくうたと唄ひ出すにつれて、すつと座敷へ現あらはれた黒奴くろんぼの踊子おどりこ、昔むかし此地方このちほうの王侯わうこうが着きたと云ふ、古い錦

襦じゆの布ぬいを縫ぬい合せた三角さんかくの帽子ぼうしを被かつて、バノンを捲まいた裸はだかの女をんなが十五六人じふごすらりとならぶ。

ノエくくくくうたと唄ひ出すと、竹琴ちくきんの合奏がっそうが始はじまる。鼓つづみの様に皮かわを張はつたものをポンくたと叩たたく。裸はだかの踊り子おどりこは顔かほを曲まげたり腰こしを振ふつたりして、妙めづかな身振みぶりをする。一座いざのものは此踊このおどりをみて、感かんに堪たえぬ様に奇聲きせいを發はつしては狂喜きやうきして居ゐる——齒はの浮うく様な竹琴ちくきんの音ね——土人どじんの醉漢よつぱらひと一緒いっしょになつて、恚かうしてラオ酒らうしゆに酔よふて居ゐる僕ぼくの姿すがたを、故郷こきやうの人ひとに見みせたい。

踊おどりは益々興きやうに入いつて、竹琴ちくきんの音ねは喉せる様に忙せしくなる。ノエくくうたと唄うたふ蠻音はんおんの呂律ろりつが亂みだれて、將まさに醉歌亂舞すいからんぶの夜宴やえんである。

油あぶらの様な汗あせをながして、踊り疲つかれた黒奴くろんぼの女をんなは、ぐたりとラオ

酒の罇の傍に座つて、ガブ／＼と呑む——新郎新婦も何時の間にか座敷にあらはれて、お客の機嫌をとつて居る。

セタムランの一夜は、恚うして椰子の月に更けた。泊るもの、歸るもの、各れも判らぬ事を大聲で語り合つて、庭先で別れた。僕はホールアン君と共に、寝心地の宜い莫産の上に足踏伸して二夜の楽しい夢を結んだ。

思ひ設けぬ愉快の一夜は易々と明放れた。

一千チカルの美人は今幸運兒トールアン君の手活の花となつて、朝の化粧をしまつて嬉しげに立働らいて居た。嗚呼一千チカルの美しい花嫁、若しも二千五百チカルを出す男があれば、其方へ靡いて了ふのだと考へると、賣買結婚と云ふ哀れな運命を悲ま

すには居られなかつた。

僕は今日出發と極めて、ホールアン君と途中まで同行する事にした。再び怪しい荷物を背負ひ、日本刀を杖突いてお別れの挨拶をすると、新郎新婦ともに別れを惜んで、セタムランの村端まで送つて来て來れた。厚く謝意を述べて出發したが、顧みると樹蔭遠くも見送つて居る夫婦の人影が見えた。

僕もホールアン君も帽子を高く振りながら、濁つたメナムの河風を浴びて、炎暑の路上に重たい靴を曳摺つて行つた。

「僕は此から何處へ往かう？」を考へながら歩いた。此時ホールアン君は僕に痛快なる福音を授けた。即ちビルマの國境に行脚を思立つ可き動機を與へたのである。

ビルマ國境のチユーレンと云ふ部落から六哩程奥へゆくと、象の群が出没するとの事——僕は茲に象狩を思立つた、爰でホールアン君に別れを告げて、臆然として目的地に向つて進んだのである。

僕は果して奈何なる報告の材料を獲る乎……。

## 第十三信

## 林 中 の 戀 の 神

## 六十 皮 盜 人 と 間 違 へ ら る

僕はホールアン君の話に依つて、ビルマ國境の象狩を企て目的

地に向つて進んだ。

相も變らず深林を潜つて、六度の露宿が熱風に明けると、應てチユーレンの部落に到着した。この一部落はビルマ國境の山麓にあつて、約六哩の山奥が象狩の行はれる場所であるのだ。

何氣なく部落へ這入つて行くと、二三十人の土人が、がやくと騒いで居たが、僕の姿をみると矢庭に蜘蛛の子を散らす様に、樹蔭にかくれて、雨の様に石礫を浴せかける。僕は憤然として巨樹を楯にとつて日本刀を惹つけて居ると、黒真な怪物共はキヤツキヤツと奇聲を發して、益々暴行を加へようとする氣勢だ。

『宜しい打ち斬つて呉れよう』

とすらりと日本刀を引抜いた儘、暫らく睨み合ひをして居ると

突然多くの土人がさつと引く。什麼した事かと油断なく前面を見  
ると、一人の老土人が此方を目蒐げて進んで来る。村長らしい風  
采である。

老土人は怖氣もなく、白刃を振冠つた僕の前へ進んで来たびた  
りと跪座づいた。而して降伏を乞ふ様に切りと頭を地に磨り付け  
る、小高い丘の上にある小舎を指して「彼方へ」と誘ふので  
此場合態と悠々として拔身を携げた儘のこくと、老土人を案内  
に丘の小舎に這入つて行つた。

臆氣ながら老土人の話を聴くと、今朝此家の前に干してあつた  
鱈の皮五枚を引攫つて逃げた支那人がある。土人は生死を賭して  
捷ち獲た大切な皮を盗まれたので、什麼かして支那人の跡を遂は

うと相談して居る矢先へ、ひよつこり僕が這入つて行つたので、  
扱この皮盗人と間違へられて、礫の雨を見舞はれた譯と知れた。  
老土人始め各れも僕のの前へ来て頭を下げる。象狩の機の熟する  
迄悠くり此家に逗留して呉れ。奈何様にも御力になりませうと親  
切に慰めて呉れた後で、例によつてラオ酒樽を擔ぎ出して醉に任  
せて暹羅踊を始めた。

其夜は更くる迄賑やかであつた。  
口馴れたラオ酒の酔を風に吹かせて僕はころりと手枕をした。

### 六十一 針打ちの少女

翌朝になると、此部落の長だと云ふ老土人は、行手を籠むる朝

霧を掃つて、象狩地の下檢分に僕を案内する事となつた。

途中、幾人の土人に逢ふたが、老土人は流石に此部落の長と推される丈あつて、大方の土人は合掌して行過ぎる。僕と老土人は漸次進んで、椰子や檳榔樹の茂つた柱に差蒐つた。

日本で云ふなら鎮守の森であらう。

老土人は黙々として先頭に立つて歩いて行く。僕は相變らず抜けば玉散る氷の刀に五尺の身體を托して、油断なく四邊に眼を配りながら其後から従つて行つた。

朝霧は森に近く益々濃くなつて来る。若し突如として霧深い森の中から、牙を鳴らして人間の美味に餓えた虎豹が飛び出したら、何だ？。と思ひながら静かな曉氣を衝いて行くと

果然！

朝霧の中から怪しの物が飛び出して、呀乎と思ふ間もなく、僕等の側を掠めて、部落の方へ走り去つた。

其後姿を見送つて怪しむ僕を顧かへつて、老土人はにこ／＼笑ひながら、深く／＼森の奥へ導なうて行つた。

日光を遮つて、晝も暗い樹蔭の徑を森の奥へ行くと、急に明るくなつて一字の堂が目前に現はれた。

高さ三尺位の一本柱の上に、宮居の形をした徑三尺の祠が乗せてある。可憐其裡には男根の形をした木造の怪しからぬ神體が安置してある。

僕は些なからず面喰つて、老土人を顧みると相變らず笑つて居

る斗りで、未だ説明をして呉れない。漸やくにして部落長は祠の脇の椰子の蔭に腰を卸して、奇妙奇天烈な「戀の神」に就て、土人娘の迷信を語る。

「戀の神」は又月下氷人である。暹羅の出雲様は赤裸々に、男根の形に祀れてあるのだ。熱帯地方は人をして青春の血を沸かしむるに極めて性急である。然れば娘十三既に物の哀れを解して、男欲しさの戀歌を椰子の月夜に唄ふて歩くのが常である。これも單に色戀の爲斗りではない。一日も早く高價く買はれて、榮耀榮華をして見たいとの火の様な空想に煽られての事である。

斯る程に妙齡十三四の少女は、一本の針を懐中にして、密かに家を抜け出て、部落の張三李四に鬢髮一本見られぬ様に木下闇か扱ては霧靄の晴れぬ間を、戀の神の森に遁入つて、足音も立てぬ様祠に近づく、此處まで來れば大丈夫である。懐中から針を出して突然祠の中の男根形の神體へ突き刺すのだ。

若し想ひの針が男根に立たぬと、少女は泣いて、神様が自分の身の穢れを忌み給ふて、戀を叶へて下さらんだ、と頂を垂れて惆悵として家路に歸る。而て一七日齋戒沐浴の後、再び針を打ちに出掛けるのだ。

妙齡の處女は一生に一度は、必らずこの戀の神に詣で、男根形の神像に願ひの針を刺すのである。さきに霧の中から現はれた怪しの者は、矢張、此類の願をかけて神に詣でた針打ちの少女であつた。

## 六十二 ビルマ亡國の憂士

神體に針を刺したる後屢々祠に詣で、は自分の針を調べるので何日かの後其針が男根から下に落ちておれば、思ひは叶ふと信せられてゐる。愈々買手によつて女一生の賣價が定まり、新郎新婦偕老同穴の契を結ぶに至るときに、男根へ針を刺して運命を卜した新婦に婿殿の名と己れの名を紙に書いて其中に十本の針を納めくるくと巻いて祠の側の樹の枝へ結びつける。而して其紙結びが風に飛べば破鏡の嘆を見る。自然と腐ちて地上に落つれば友白髪まで添添げられる——と。堅く土人の間に信せられて居るのだ。

老部落長の説明を聞いて祠を見上ぐると、數千本の凶の針は錆びついて隙間なく刺して立てられ、神體の下には堆重て拔落ちて其たび叶ふと暗示した吉の針が積まれてある。而して錆た針の間間に光る針は新しい戀と新しい愁ひに沈む少女の打つたのであらうと思つた。奇妙な縁は思はず知らず僕を目的とした部落長の家に導いて、知らずくの内象狩の目的が進行しつゝある。誠に運命程奇異なものはない。殊に此所チエートンの部落長たるナセルミーハは、ビルマ國の志士だ。彼れは英國の領土となつて以來悲憤慷慨の念を禁ずる事が出来ぬ。常に悶々の情を抱いて、時機あらば再び花咲く昔のビルマに返さんと、壯年の頃から私かに同志を集めて居たが、時機遂に到來せず。徒らに寄る年波は遠慮なく彼れの身邊に押寄せて今年六十有餘の考翁となつて了つた。彼

は遂に恨みを吞んでチユートンの部落長となり、餘生を保つて居るのだから、彼は其部落長のみならずビルマまで其勇名を轟かした仁侠なる志士として尊敬せられて居るのだ。僕は幸ひにも斯の如き老部落長の非常なる同情を得て、象狩を決行する事になつたのだ。

二人は懸てサモーラの大平原より歸つた。歸ると等しく老部落長は部落は無論、近傍の各部落まで、勢子及び象狩に使用すべき多数の象を集むべき命令を下した。

此命令が出ると同時に、全部落よりは十八歳より五十歳までの勢子が七十人許りと、運搬用獵用の巨象が五十頭瞬く暇に集まつた。するとナセルミーは其勢子等を率ひて、先づサモーラの平原

を檢分した結果に因つて各要所々に野象を生擒すべき陷穽を半圓形の列に無數に掘らせた。長さは六丈幅二丈深さ一丈六尺の大穴だとして、其穴の中は約四尺許の泥濘を湛へてある、之れは陥ち込んだ巨象が膝を没して悶え苦む様に出來て居るのだ。又其日夕暮れに諸般の準備を整へて欣々然として歸つて來た。

第十四信

最後の象狩

六十二 小面憎い指揮象

彌々象狩の日はきた。獵用の巨象は五十頭、勢子七十人、之に



老部落長のナセルミーと僕が加はつた。ナセルミーと僕とは五十頭の内の一番敏捷な一番巨きな象脊に乗つた。他の土人等も思ひ思ひに四十九頭の脊に飛び乗る。そして其等の者共は、手にく三四間柄の槍を持つて居る。これぞ野象を追ひ出すべき唯一の武器なのだ。五十頭の巨象は僕とナセルミーを乗せたのを先頭にノソリノソリと歩き出した。熱帯の太陽は今や東の地平線をはなれて、其赫々たる強き光線を一行の上に投射した。一行の勇氣は旺んに方に來るべき象狩の凄じい光景を思ひ浮べつゝ、徐々としてサモクの平原を望んで進んだ。

五十頭の巨象の脊に、七十有餘人の土人を乗せた象狩の勇しい一行は、野象の群居すると云ふサモーラの平原を望んで出發した

恰度其日の晝近くなつた頃目的地たるサモーラの大平原の一隅に着いた、サアいよく此平原より巨象の群を追ひ出して生擒するのだ、先づ總大將のナセルミーは、一行に其一般方略を命令した。命令に應じて五十頭の象に分乗した土人の勢子等は、サモーラ平原に設けた陷穽を迂回して、遠く三哩半許り南方に進んだ。ナセルミーは僕と乗つたる象脊に直立したかと思ふと直に

「進め」

と一聲高く張り上げた。土人の勢子等は、口々に奇聲を發しつゝ、互に七八間の間隔を取りつゝ巧みに巨象を驅り出した。何しろ五十頭と云ふ巨大な象が、熱帯の大平原を牙を鳴らし鼻を振つて疾走するのだ、未だ野象を驅り出さぬ前から、僕は壯觀に驚い

て了つた。

凡そ平原の深草を分けて半哩斗り進んだ頃、一番左側を狩り立て、居た士人が、怖ろしい叫聲を上げて、かと思ふ間もなく、約一哩斗りの杜の裡に、凡そ七八十頭斗りの象群が現はれた。これを見たるナセルミトは、又もや象の脊に直立して

「左へ！左へ！」

と連呼しながら、象の鼻面を野象の群の方へ向ける。

士人等は手にせる大槍を縦横に振まわした、矢の如き象の快速力を頼んで其脊上に狂い廻る。

半哩——一哩——將に群象の真中に突進せんとした瞬間、群象中の最も牙の長い奴が逃げ出した。此は無論この一群の指揮象ら

しい。すると七八十の巨象の群は、不恰好な筒の様な太い四肢を上げて、小山の崩れ飛ぶ様に動き出した。ナセルミトと僕を乗せた巨象は常に先頭を走つて居る。抜群の巨象は幾度か狩立てられた經驗を有つて居ると見えて、却々思ふ様に陥穽の方へ鼻面を向けぬ。僕はナセルミトが、何故あの小面憎い指揮象に向いて戦を挑まぬか齒痒ゆくてならぬ。而して僕等の乗つて居る象が、指揮象と擦れ違ふ途端に、僕は面白半分指揮象の脇腹目菟けてぐさ、と手槍で突く。同時に僕の背中をグズンと擲りつけた者がある。呀つと思つて願かへると、ナセルミトは物凄い眼を光らして怒つて居る。

六十四 凄まじき逆襲

僕は思慮すべき違が莫い。

手槍で突かれた巨象は、凄まじく唸ると同時に、くるりと方面をかへて五尺餘りの牙を突出して僕等の方へ逆襲して来た。

不思議！今迄は風を切つて逃廻つて居た野象の群が、この指揮象の憤怒の態を見ると等しく、一齊に鼻面を僕等の方へ向け直して、猛り立つて押寄せて来る様子、此時ナセルミーは

「最早駄目だッ、最後の手段だ」

と怒鳴り立て、奮然として手槍を振りつゝ野象の群へ突進した。これを見た他の土人等も遅れじものと叫びながら、象の脊で

狂ひ廻る。

僕は何だか、さうばかり判らぬ。殆んど茫然自失、徒らに象の脊に縋りついて居る。五分、十分、野象の群と僕等を乗せた象の群とは入亂れて、牙と牙、鼻と鼻とを突合して象同志の一大修羅場を演出した。

場所はサモークの大平原なり。

殊に獸類の巨王なる象群が狂ひ廻り荒れ廻る凄まじさ、木と云ふ樹は、どいつつくと突合ふ象の鼻に打倒され、草と云ふ草は巨きな牙に薙ぎ立てられる。若しこの牙？鼻？に打たれたら最後、木葉微塵にされて了ふ。然し流石に土人共は馴れて居る。ナセルミーの大膽巧妙なる號令の下に、大平原中を自由自在に走せ飛び

つゝ、只一撃と怒り狂ふ野象の群を、右に左に避けながら、槍を揮つて格闘する。

恚うして烈しい格闘を続けながら、次第くゝに例の陷穽の方へと導く。

火の様な大格闘が、凡そ二十分も續いた頃。

「發砲ッ」

と破れ鐘を叩く様なナセルミーの大聲が響くと同時に、脊上の士人は肩にした佛蘭西式の古銃を取直すか、群がる野象を目蒐けて一齊に打出した。これには有繫の巨象も驚いたらしい。孰れも後へくと退却を始めた。距離數十間！此處を逐つめれば野象は陷穽に落ち込むのだ。

「わーッ」

と土人の叫聲に逐はれて、象群は陷穽へ近づいた。

あなやと云ふ間もなく巨象は、すほりくと陷穽へ陥込んで行く！！

恚うして十數頭の巨象を生擒した。

ナセルミーは莞爾として

「貴君が槍を出した爲に大層骨が折れましたせ」と拳を當てた無禮を謝した。

僕は間もなくチエーレンの部落を離れた。

六十五 左様なら！諸君！！

僕はこの象狩をもつて、一先づ猛獸狩の通信を中止する事にした。重大なる通信の任務をもつて、馬來半島を跋渉した時々の出來事は、何れ筆を更めて稿を新にする意である。最後に臨んで諸君の健康を祈る。  
左様なら！諸君！！

馬來半島の猛獸狩 完

明治四十四年五月廿一日印刷  
明治四十四年五月廿一日發行

著者 松尾 茂

發行者 大橋新太郎  
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷 景長  
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所  
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 博文館  
東京市日本橋區本町三丁目

馬來半島の猛獸狩  
著作  
所有  
定價金廿八錢

# 南洋群島珊瑚島探検記

岡 雷平君著

(珍奇寫真版八枚入)

やまと新聞評

世間海島探検記の類が少くないが其の多くは西人の翻譯物か針小棒大の誇張談である。然るに本書は著者が水産講習所の雲鷹丸に便乗して無人島や蠻人島を經巡つた唯一の土産物で恐しい事や珍らしい事や不思議な事を藏めた寶庫の鍵とも云ふ謂ふべきものだ。書き振りがなが／＼氣が利いてゐる。

全一册菊半紙 正價金廿錢  
紙數三百十六頁 郵税金四錢

(行發館文博)

# 地中の秘密

江見水蔭君著

(11繪寫真版數頁挿入)

變勇の力を以て地中の秘密を發くべく深く貝層の間に掘り入りたる著者の探検實記なり其發掘の壯烈なる其遺物の怪奇なる文章自在に之を表はし三千年前の日本先住民が生活の状態は悉く紙面に活躍せり然れば文學上の産物としても科學的の著述としても優に當代の奇書たるを失はず考古家の參考所たり旅行家の案内記たる以外に家庭の好讀物として之を江湖に薦む

全一册菊判 正價五拾八錢  
三百二十頁 郵税金六錢

(行發館文博)

# 世界無錢旅行

冒險世界記者

押川春浪君編

(寫真版八葉挿入)

書 險山あり激流あり妖  
女あり俠士あり忽ち蠻  
境の悽月して大  
汽船甲板の競技  
千變萬化の蠻勇旅行は何  
痛快を叫ばず居  
られまい

全一册四六判 正價金廿八錢  
三百四十頁 郵税金六錢

-(2)-

# 地中探検 捕鯨船

江見水蔭君著

著者自ら捕鯨船に乗組んで遠く朝鮮の懸崖に漂泊し、諸威砲手が狂瀾の程に照尺を定むるの時暴瀾の間に起ちて一管の筆桿を呵し、捕鯨の大壯觀を實寫して深く海底の秘奥を發く本編は此紀念帖也。氏の意氣や石炭。氏の詩想や壯大。本書がいかなる快文字を以つて成るかば茲に言ふを俟たざるべし。

全一册菊判 正價金卅五錢  
三百二十頁 郵税金六錢

-(3)-



踏破世界の五十萬哩

第四卷

●亞弗利加一周

(以下逐次刊行)

(踏破の範圍)

亞弗利加全部

次目

○孟買出發  
○厄介極まる英國官憲  
○波斯街境  
○馬車拒む  
○沙漠の驛  
○古史の波  
○馬鹿野郎  
○沙

第三卷

●鐵脚縱橫

(踏破の範圍)

印度の一部、波斯、土耳其、希臘、伊太利、佛蘭西、英國、埃及、西班牙、葡萄牙、マテイ、島

次目

○破天荒の壯圖  
○富士山頭の袂別  
○那珂博士と大阪に會す  
○九鐵全線の無賃乘車  
○長崎に入る  
○山中に格闘す  
○客を見ても米を搗く  
○英人の密航  
○馬賊の刺傷  
○人力車より落つ  
○西朝の常習  
○蘇州の變カラ主義の同人の製

破天荒の大探檢

第壹卷

●亞細亞大陸橫行

(踏破の範圍) 朝鮮、支那、暹羅

第貳卷

●南洋印度奇觀

(踏破の範圍) 南洋諸島及印度

次目

○破天荒の壯圖  
○富士山頭の袂別  
○那珂博士と大阪に會す  
○九鐵全線の無賃乘車  
○長崎に入る  
○山中に格闘す  
○客を見ても米を搗く  
○英人の密航  
○馬賊の刺傷  
○人力車より落つ  
○西朝の常習  
○蘇州の變カラ主義の同人の製

五大洲探檢家

中村直吉君 共編 ●發行所 博文館 ●

四六判洋裝美本紙數各册三百頁以上 正價 金四拾五錢 郵稅各

先づ本書の目次を見よ



やまと新聞記者 山本龜城君著

# 政界の寧馨兒

【發行所 博文館】

全一冊 洋装四六判美本  
寫真版九頁挿入  
正價金三十八錢  
郵税金六錢

篇中十七名或は非寧馨兒もあらんされど概して一省の花形と稱せらるゝ者也著者は英雄崇拜を以て鳴る今其俠氣を叙し英風を捕足するの處筆力縱横風發の概あり若し夫れ行文の裡爲政を論じ逸話を叙し政系を語り政界の秘脈を巧に模索したるに到りては近來出色の人物月旦にして春宵秋夜の一大讀物たるなり

島田三郎君序 小野田翠雨君著

# 現名士の演説振

全一冊 洋装四六判美本  
紙數三百二十頁  
正價金四拾五錢  
郵税金六錢

本書は著者が二十年来の経験に依り其速記眼に映じたるものを公平に率直に忌憚なく素破抜き演者自身でも己れに此様な癖があつたかと本書を見て始めて覺る位で先きに讀賣紙上で大評判を取つたものを増補訂正し、ものです本邦は演説研究者の好材料たるは勿論一度本書を讀んだ後で諸名士の演説を聽きて彼是比較して見ると餘程の趣味があらうと思ひます誠に近來にない本です

天城安政君著

（全一冊四六判）

# 立志の師表 成功の模範 カ―ネギー

正價金廿五錢  
郵税金六錢

博文館

古來偉人傑士其人に乏しからずと雖もカ氏の如く身を一織物師に起し曾て一弗半錢の遺産を受くるなく奮自己の正眞の額の汗に依つて巨萬の富を作り而かも之を天下公共の爲めに散じ盡したる如きは眞に稀なりと云ふべし本書は此傳を詳録して彷彿其人に接するの思あらしむ

森一兵君著 (全一冊菊判)

# 致富要訣

正價金二十五錢  
郵税金六錢

陶朱翁の富其富を致すは原あり、ロスチアイルド、ムアンダ、ビルドの富豈亦他あらんや此著是れが原を説く事極めて詳密讀者を指導して正に富の門に入らしむ巨富を致さんと欲するの士は一本を購ふて其秘を知り給へ

奥村二秋君著 (全一冊袖珍)  
鹿野化骨君

# 現代名流 實業青年立身策

正價金廿八錢 郵税金四錢

本書は現代名士卅五氏が高説を網羅したるもの其の内容は職業選擇の注意早く職業に就く可否會社商店員の資格等實業青年の是非心得ざるべからざる事項を掲げたり



# 少年學術界の大發展

(著編家名諸)

## 體裁

非裝長形厚表紙  
裝釘瀟洒美本每  
編美麗なる口繪  
數葉挿入紙數各  
冊二百八十頁以

## 定價

一冊 金二十八錢  
十冊 金二圓六十錢  
十五冊 金三圓八十錢  
二十冊 金四圓廿五錢  
郵金 各金四錢

## 見よ！

少年學術界の大發展  
少年百科叢書の創刊

第一編 ● 先哲勉學訓 竹貫 佳水君編

第二編 ● 世界名君傳 前田 越嶺君編

第三編 ● 讀書法 竹貫 佳水君編

第四編 ● 世界名臣傳 前田 越嶺君編

第五編 ● 天界の觀察 澤田順次郎君編

第六編 ● 地界の觀察 澤田順次郎君編

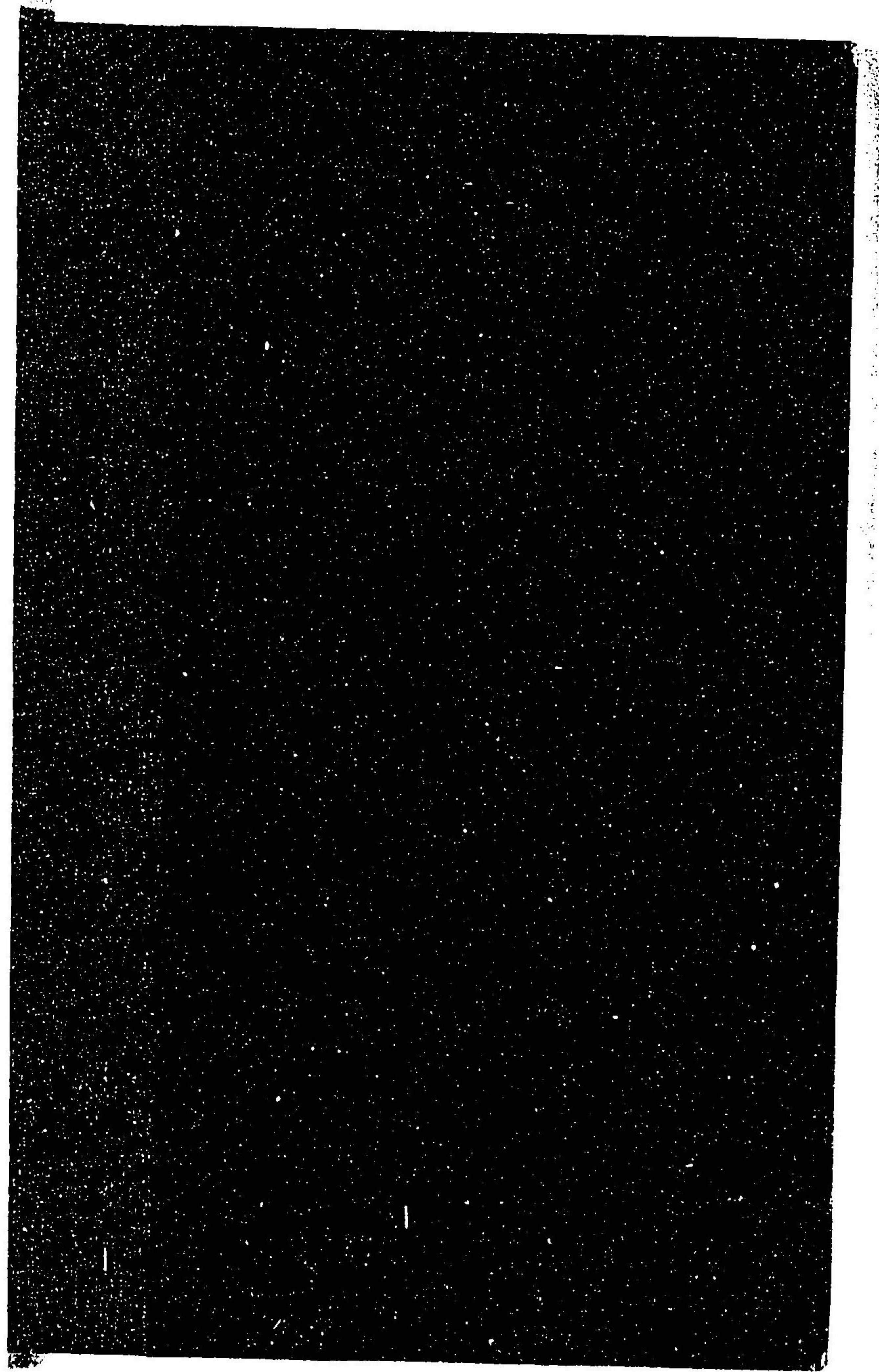
第七編 ● 冒險英雄傳 河岡 潮風君編

以下毎月一回又は二冊宛續々刊行

發行所 博文館

67

25  
982



25  
982

026799-000-0

25-982

馬來半島の猛獸狩

松尾 茂/著

M44

ADD-0500



93.3.28